



筑紫女学園大学リポジット

世界華文微型小説の創作に関する一考察 — 《世界
中学生華文微型小説コンクール優秀作品選集》を中
心として—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/79

世界華文微型小説の創作に関する一考察 ——《世界中学生華文微型小説コンクール優秀作品選集》を中心として——

石 其 琳

A Study on Writings of World Chinese Short Short Stories

Kilin SEKI

前 言

これまで中国現代文学の新ジャンル「微型小説」(別名「小小説」)について、さまざまなテーマの作品及び作品集を多くとりあげ、多角的に研究を行ってきたが、本論もその継続研究である。

今回は作品集《世界中学生華文微型小説大賽優秀作品選集》^(注1)を研究対象としてとりあげる。この作品集は香港「匯知・世界中学生華文微型小説創作コンクール」及び香港地区において、ここ数年間に行われた、中学生の微型小説創作コンクールの受賞作品を含む作品選集である。作品集の冒頭には香港の文学評論家阿兆氏が書いた序文があり、この作品集が出版される2008年まで、香港匯知教育機構は出資しながら香港微型小説創作コンクールを既に6年間開催していることが知れるし、その後も継続して毎年開催する予定であるという。そして2007年には初めて「匯知・世界中学生華文微型小説創作コンクール」を開催し、さらに2010年には第2回目の開催計画を述べている。実際には「香港萬鈞教育機構」より、2回目のコンクールは2010年3月に開催され、その後、入賞者たちの作品集^(注2)も出版されている。

大会に関する資料^(注3)によると、2007年のコンクールでは、参加者の分布は中国内地の省市をはじめ、10を超える国家地域を含む4000人を超える投稿があり、実に大きな反響をよんでいる。この実態を目のあたりにして、第2回目のコンクールも開催されたのである。

大会の開催主旨には、学園においての閲読と創作風潮を推進し、学界と作家の連携を深めたいと、明確に示されている。よって、このコンクールは若い世代が華文創作力を高める有力な大会であると言える。今回本稿でとりあげる作品集は、華文社会、とくに第一公用言語ではない地域を含め、重要な位置づけが確信できると考える。

まず、この大会の成果をあらわす作品集に注目する理由を、以下述べる。

その1：中国現代文学の新ジャンルに微型小説が定着して以来、多様な優秀作品集が出版社から年度別で、またはテーマ別に多数出版されている。なかには小、中学生の読者を対象に編集された人気作品集も多く見られる^(注4)。だがこれらの作品集の作者たちは一般人であり、作品の内容が小学生、中学生に適応したものを中心にして、特別に編集されたものである。今回本稿でとりあげる作品集の特徴は、作者たちは創作当時、すべてが中学生または高校生であり、収録された作品は、単なる作文的な習作ではなく、均しく創作コンクールの受賞作である。これらの作品を通して、微型小説における、若年後継者たちの創作思考、多様な実態が考察できると考える。

その2：作品集のタイトルには「世界」と「華文」が条件要素とされているため、微型小説を研究するにあたって、世界を視野にした、華文社会での創作環境と実態を理解する好材料だと考える。この作品集が「世界」を掲げる背景と編集目的などについては、後に触れるが、実際にこの作品集に収録された60編の作者たちの出身地を見れば、中国内地を数人とコンクールを主催する香港地区の在住者が多くを占めているが、ほかにマカオ、シンガポール、マレーシア、ブルネイ地域出身の作者もいる。そして「華文」が創作手段であることで、この作品集の華人社会における位置づけを検討し、作品から現在世界で「華文」が多用されている地域社会の現実と問題点の多くが、洞察できる。

以下本稿は、まずこの作品集の編集趣旨、出版背景について簡単に説明し、次に作品集の特徴に関わる問題点を、作品を具体的にとりあげる。

I 作品集の編集内容と目的について

この作品集は「香港超域国際教育センター」及び「中国微型小説学会」によって編集されており、計60編の作品が収録されている。作品は中学生と高校生の部に分けられていて、前半は中学生の作品24編、後半には高校生の作品36編が収録されている。各作品には必ず作者の姓名と出身校も記載されているため、作者の出身地域を知ることができる。そして参加したコンクール及び受賞の順位も明確に記載されている。

編集では、作者、作品に対する説明資料のほか、各作品の最後には必ず「主催大会の顧問」の二人による批評が記載されている。この主催大会の「顧問」というのは、およそ香港地区の著名な微型小説作家、または関連学会関係者たちであるから、より専門的な批評が提示されているといえる。コンクールの受賞作品とはいえ、やはり中学生、高校生の創作であるため、指導的な指摘またはアドバイスのような評語も少なくないのである。批評者が複数であるため、それぞれの見方に相違性がみられることも、この作品集の一つの特徴といえる。そして批評者には学生の作者に対して、勉励の気持ちが随所に見受けられるし、この点からして、華文創作の伝承と発展に大きな期待を寄せていることが知れるし、最大の編集目的であると考えられる。

Ⅱ 作品の特徴と創作における問題点について

この作品集の作者は中学生と高校生であることから、作品は多方面において、さまざまな特徴が見られる。ここでは創作のテーマと表現について注目したい。以下は作品を提示しながらそれに関わる問題点を考察する。

一 作者達の出身地域からみる問題点

この作品集の作者の出身地域を集計したところ、中学生部は香港15名、シンガポール5名、中国広東深圳1名、江蘇省1名、重慶市1名、マカオ1名である。高校生部は香港20名、シンガポール4名、マレーシア4名、中国広東省3名、上海1名、雲南省1名、マカオ2名、ブルネイ1名であるが、明らかに中国本土以外の地域が少ないのである。その理由としては上述したように、コンクールの受賞作品は少なく、ここ数年間に香港地域を中心に行われた創作大会の受賞作品も多数収録されているから、自然に香港出身者が多数を占めているのである。つぎに香港と中国本土以外の受賞作者の国別に注目したい。

華文が第一公用語でないシンガポール、マレーシアでは多民族国家であり、中国系（華人）の割合は比較的に高く、現地の華文教育制度は幼、小、中、高、大学とシステム化されている。しかし現地で生まれ育った若い移民世代では、華文離れが深刻になりつつあるのが現実である。若い世代の華文教養レベルが常に華人社会の問題であったし、現地の華人たちが子孫の華文教育を積極的に手がけていることも事実である。その実態といえば、若い世代にとって、日常生活に華語を聴く、話すことができても、書く力がともなわないのである。よって正式の学校教育以外に、民間の華文学習塾のようなところが各地に作られ、若い世代の華文レベルの向上をめざしている。さらに華人たちが自己の居住地で、子供たちの華文教師を探す広告をウェブ上で見ることもある。このような現象は、シンガポール、マレーシアに限られたことではなく、世界の華人居住地で共通して見られる。

さて、コンクールの参加規則について。華文（中国語）での創作は微型小説文体に限定されているから、字数は1500字以内（标点記号を含む）が条件である。また学校推薦で参加者多数の場合、一度に40名までを上限にしている。主催側の主旨として、より多くの地域から参加できるという配慮であろう。この作品集の受賞者の中には、中国本土、香港など華文を母国語である作品が多数受賞しているが、参加者の実数が4000人以上10カ国地域を含むので、母国語でない地域の参加者も少なくない。また華文が母国語でない中、高校生参加者たちにとって、「微型小説」の文体は第一公用語でない華文創作に、適したジャンルであると考えられる。これらの背景から、この作品集が世界華文教育における重要な位置づけがうかがい知れる。

次章からは、作品の創作テーマと表現の特徴について考察する。

二 作品創作の特徴について

この章は、作品を具体的にとりあげながら、その創作テーマの特徴を考察する。作者たちが創作時には学生であるため、作品のテーマが身近な学校生活を舞台にするものも見られるが、実際に多くの作品は社会全般を視野にした創作である。青少年である作者たちは、自分たちの目線で、社会の現実、家族、親子、夫婦、恋愛などさまざまな人間模様、または社会に潜む問題を観察しながら、青少年が感ずる成長の悩みなどに対して、多様な手法で表現している。以下は作品とその内容を列挙して、具体的に作品にふれながら、創作の特徴について考察する。

(1) 学校生活に関する作品

作品①「抄」(カンニング) 周玥 作 (広東省 深圳)

厳格な父親からいつも成績の悪さを怒られる主人公は、試験中に隣の学生の試験問題答案を必死にカンニングしながら自分の答案紙に書き写したのだ。試験終了後かなり成績に満足した彼は、先生の前で自分と隣3人の答案紙が並べられ、まさか同じ46点になっていることに吃驚仰天だった。そして「一人だけのカンニングなら仕方がない、3人も同じ間違いするなんて・・・」と先生は怒りを抑えきれないほど机をたたいて怒鳴った。「まずいな、行を間違っって写してしまったんだ！」と主人公と同じ機の座席の学生がなげいた。

この作品は典型的な学園テーマである。試験は常に学生の悩みの種であるが、作者はできの悪い学生を厳格な父親から怒られないため、カンニングをする理由を提示し、同じ不正をする学生たちの失敗をおかしく描写している。学生生活の一側面を共感させる作品である。

作品②「今日は誰の当直？」 朱杏蘭 作 (広東省 台山)

あるクラスの学級長が朝慌てて学校に着いた、パンをかじりながらパンの紙袋を投げ捨てた。「どうせまだ掃除してないから」と周囲を気にしながら教職員室まで大股で向った。彼女は学級長なので、月曜日必ず担任の先生に学級の状況を報告しなければならないのだ。

「なにか問題があるのか？」と先生から尋ねられたところ、「当直の人は自覚が足りない、仕事もぐずぐずして、ゴミをポイ捨てするし、寮がゴミ捨て場みたいになっている・・・」と当直者が責任を果たしていないことに問題があるのだと、自分の無念さを強調したのだ。そして寮に戻っても、八つ当たりのように食べ散らかしながら、他の同級生の沈黙と無反応に腹立て、「いったい誰が今日の当直なの？」と責めたところ、「あなたです」の答えが返ってきた。

中国では寮制度のある学校が多いため、この題材は学校生活の日常であり、学生の生活態度について学級長の「彼女」を通して、そのいい加減さを描写している。狭い学校生活から広い現実社会を映し出す内容である。

作品③ 「悟り」黄竹賢 作 (マレーシア)

ある日の放課後、優等生の葉飛が不良に遭いお金を要求された。手持ちの金額が少なかったために、不良たちの不満をかい、なぐられそうになった時、クラスで成績の悪い同級生の偉雄から助けられたのである。翌日感謝の意をつたえると、偉雄からその日の午後、駅に来るようにと誘われた。行ってみると、偉雄ともう一人の成績悪い偉倫がある老人ホームでボランティア活動をやっていたのである。そこで自分がこれまで彼らに対してとった、傲慢な態度を恥ずかしく思い、その後彼らに勉強を丁寧に教えるようになったという物語である。

この作品の内容は特別ではないが、学生たちにとって成績は、常に悩みの種である。一般的に成績の良し悪しが学生の判断基準である。この作品はそれに対する、あるクラスでの優等生の恐れる経験を通して、異論を発信しているのである。作者はマレーシア居住の学生だが、成績重視の価値観は地域を問わずに存在している。特に華人社会において、このような伝統的思考が深く根付いているといわれている。中学生だからこそ成績が切実な悩みであり、その価値観に直面し、この一般化された差別概念を突破したい気持ちを作品のテーマにしているのである。

作品④ 「7通の手紙」林希昕 作 (香港)

作品の主人公はある学校の劣等生で、自分が住んでいる地域 (香港) の教育制度が悪いと感じ、今度火星へ転校する予定である。そこで香港の教育制度に関わる教育局長、秘書長、自分の学校の校長、クラスメート、担任の先生、転校したい火星学校の校長6人宛てに、手紙を書いている。最後に盗み読みされたことを想像し、その人々を対象にもう一通手紙を書いて、自分の思いを語ったのである。手紙の内容は、それぞれの受取人との関係によって異なっている。例えば、教育局長に対し、「小学校3年生はどれだけ苦勞するのは知っていますか」と問いかけながら、自分は火星でもっと自分にあった学習方式を探したい。そして多くの学力テストに対して、もう疲れ果て、火星ならこのような試験はないだろうし、自分も精神病院に入らなくてすむと書いて、現在の教育制度を批判しているのである。もとは地球に勤務して、地球の教育制度に不満を感じ火星へ移った火星の校長先生への手紙には、自分のごく普通で「平凡な」小学生だが、常に周りから実現できない希望を多くもたらされている。口ではできなくでもいいと言いながら、大変なプレッシャーをかけてくることに不満をもっているが、共感できるだろうと先生に語ったのである。担任の教師への手紙の最後には、「あなたも私と同様重い圧力を受けているから、私と一緒に火星へ行きましょう。」と教師たちの苦勞には理解を示し、同情する。

7通の手紙の対象者が異なるため、自分のサインもそれに合わせて、それぞれ違うものになっている。例えば教育局長に対しては、「できの悪い学生」、秘書長に対しては、「間もなく火星へ転学する小学校3年生」、校長先生に対し「あなたが最も恐れている学生」と、クラスメートたちには、「みなさんから尊敬された兄貴」、担任の先生には「あなたが嫌いな学生」そして火星の学校の校長には「あなたの未来の学生」と自署している。この署名の内容から「学校」という社会の側面が露呈されていて香港に限らず現在の学校教育制度における問題提起である。現役の生徒

からの作品としては、とくに実感できる題材である。

(2) 社会問題に関する作品

作品⑤ 「草を捨てただけだ」 楊蕙澤 作（重慶）

町に蘭草の市場がいつの間にかできて以来、地元の住民たちは蘭に対する知識はないが、山へいく蘭の採集がブームになったのである。主人公の老人は、ある日偶然に山のふもとの石の隙間に、一本の黄色の花が咲いている蘭を見つけ、随意に採ってきた。2、3元、否この蘭は元気がいいので、5元ぐらいは売れるかも、と老人は考えた。歩きながら突然車が自分のそばで止まって、中から青年が「お爺さん、その蘭を売りませんか？」と声をかけられたのだ。

「売るよ！今採ってきたばかりだ。」 「いくら？」

「任せるよ。」 「50元はどう？」

「なに？」自分の耳を疑うほどびっくりしたが、大した値がつかないと思ったので、青年の誠意に困惑した老人は、躊躇した末、「そんなに好きなら、やるよ！」

「それは困るよ！」と青年。「別にいいよ、ただの草じゃないか、どうせ拾ってきたのだから。」老人は市場から村に戻って、すぐに人の群れに囲まれ、「知ってるかい？今朝、おまえさんが人にやった草は、町では5000円で売れたそうだよ！」老人は無言のまま。

数日後にまた都会の博覧会で、あの蘭草が5万円で売れた噂が流れた。……村人はお爺さんが騙されたことにすごく憤慨して、「なぜ悔しいと思わないのかい？」とワイワイ議論しているが、突然老人は大声で「もう黙れ！」と叱った。「悔むことないじゃない、私は5万円なくしたわけでもないし——ただ一本の草を無くしただけさ。」

この作品は今回のコンクールで中学生部第3位を受賞している。中学生の生活とは違った世相批判がテーマである。村人の貪欲さとお爺さんの無慾を対比して、生き生きと描写されている。

作品⑥ 「無私の援助」 宋陶陶 作（江蘇省）

湖畔に無邪気な子供たちがにぎやかに遊んでいた。都会からやってきた恋人たちが車から降りて、魚釣りにやってきた。戯れの子供たちを自分たちの邪魔だと、すぐに追っ払って、湖へ向った。急に女性の叫び声が聞こえてきた。指輪が湖に落ちてしまったようだ。「婚約指輪だ、どうしよう？」と、背広姿の男性は焦って、子供たちに湖に入って指輪を探してくれと頼んだのだが、子どもたちは先ほどの彼らの態度に、不満をだき動かなかったのだ。女性はとってくれた人に500元あげると誘ったが、子供たちはお金持ちの言うことなんか信用できないと、動こうとはしなかった。……急に一人の子供が湖に飛び込んで、しばらくして指輪を見つけ、びしょ濡れの体で震えながら岸上がった。男性はその子に500元をわたそうとした。ところが女性が横からそのお金をとりあげたのだ。そして「500元あげるのは冗談だよ！50元でいいのよ！」と言い、50元をわたそうとした。しかし子供は受けとろうとしない。

「少ないとでもいうの？」子供は頭をふって「いいえ、少ないとかじゃない、お母さんからいつも人を助けることは、報酬なんかもらってはいけないと言われたから。」

男性は茫然と「じゃなぜ帰らないの？」

「ぼくはあなたから『ありがとう』の言葉を待っているのです。」

この作品はコンクールで中学生部の第2位を受賞している。作品⑤同様に子供の無邪気さをもって、大人の偽りと無徳を反映する社会風刺のテーマである。最後に子供から当たり前すぎる一言で、読者に啞然とさせる奥深い趣きを示唆している。

作品⑦ 「私がいただく——『英雄賞』 陳若冰 作（シンガポール）

主人公は都心を往来する人ごみの中を歩きながら、いつものように周囲からの冷漠さを感じている。ところがある日、都心で突然ひったくり事件が起こった。「捕まえて！犯人を捕まえて！」と叫び声が聞こえてきた。しかし周囲は全く無関心な民衆に疑問に思いながら、自ら飛び込んで犯人と格闘するが、犯人が持っていたナイフに刺され、けがをしてしまった。主人公は胸に包帯を巻かれ、あるホールに連れて行かれた。そこで自分の首に、また一枚の輝く新しいメダルが掛けられた。……その後また都心に戻ったが、自分のメダルを眺めながら、夢を見たような気がするのである。周りは相変わらず冷酷で、無関心である。このメダルはただのメダルではあるが、だれでも簡単に所持できるものではない。……もしかして、いまは既に失われてしまった——「勇敢」と「正義」の心は、かつて、人びとがみな持っていたものではないだろうか？

私は……ただ一匹の平凡な警察犬である。

この作品は高校生部の第一位を受賞している。一匹の警察犬の目線から、人間世界の道德倫理観の低下、人情の冷漠さを憂いる社会風刺のテーマである。

作品⑧ 「とまれ！」 鄺鳳香 作（香港）

香港の通勤ラッシュ時間帯のバスを舞台に、そのバスの中で起こったセクハラ事件をとりあげている。被害者の女性に対し、犯行事実を目の前にして、乗客の誰もが助ける行動を起こさなかったのである。被害者の女性が孤軍奮闘して対抗するのだが、犯人は周囲の空気から乗客たちの冷漠的反応に安心して、その加害行為をエスカレートさせていくのである。そして犯人の手は女の胸を触りはじめた、被害者の女性は「だれか……バスを止めて……」と絶望的に叫んだが、車内の乗客は依然として忙しそうに、うるさく携帯電話に向かって喋り続け、知らぬふりをするのだ。実は乗客の中には、制服警察官もいたのだが、こっそり警察官のバッチを外して、目撃しながら身分を隠したのである。そこに突然、ひとりのよぼよぼしたお爺さんが息を荒くして、慌てて杖を振りまわしてバスの先頭へ向って突進した。犯人はたまげ、慌ててバスから飛び降り逃げていったのだ。バスの中は急に静まりにかえったが、お爺さんは大声で「止まって！早く止まって、もう二駅も乗り過ごしてしまったんだよ！」と叫んだ。そして車内は……。

この作品は、香港のバス事情を通して、痴漢の大胆な犯行と被害者の女性に対し周囲の冷酷さ

を描写している。香港に限らず、各地とも日常によく起こる痴漢事件を題材に、社会の無情さを露呈させている。お爺さんが焦って大声で叫んだことばには、乗客に対する叱りにも聞こえる。

作品⑨ 「バス代」 高佩雯 作 (マカオ)

主人公の彼女は母親からバス代をもらったが、小銭がなくて、「1 銭」足りずのままで、バスを乗り通そうとした。「1 銭」を両替するため、千元を両替しないとイケないし、また10元の手数料を取られてしまうし・・・と母親は難色を示しながら、彼女に3元2銭しかわたさなかつたのである。「噂では、バスに乗るとき、みな3元だけしか払わない人が多いそうだよ・・・」と母親がいった。バス停には出稼ぎの「民工」の乗客が多く集まっていた。緊張する主人公は彼らの後ろについて乗りこみ、バス代を運転手さん横の箱に入れて、席に座った。もしばれたら絶対に認めないようにと心に決めていた。バスは発車したが、運転手さんは「バス代はきちんと払ってください」となごも大声でいったのに、乗客はなんの反応も示さなかつた。そしてバスは止まった。運転手さんはつかつかと彼女の座席へ向かってきて、「バス代が足りないよ！」と、乗客は互いに目線を交わしたが、なんの行動もとらなかつた。運転手さんは立ちどまり、「払わないのかい？」と迫った。彼女は心臓が飛びだしそうに怖くなった。突然彼女の前席の乗客が「私・・・只1銭足りないけど・・・」「あなたのことじゃない、あなたの前席の人にいてるんだ。彼は2元半しか払ってないんだよ。」その人は彼女の二つ前の席に座っていたのだ。

作品⑧同様、バスの中を舞台にしたテーマである。世界中でバス代におつりが出ないところが多いのである。乗客が自分で小銭を用意しなければならないし、この支払法には不便さが伴うのは確かである。社会制度の不条理を背景に、群衆化された不誠実な心理状態の問題提起である。

作品⑩ 「最後の小菊」 李康嵐 作 (香港)

すでに宇宙へ移住した主人公が地球へと里帰りする物語である。地球に残ったおばあちゃんと一緒に宇宙へと誘ったが、「私は地球で生まれ育ったし、ここは大好きだ。ここには私の思い出がたくさんつまっている。今地球は汚くなって、醜くなってしまったけれど、私の心の中では永遠に一番美しいところだと思う。もう残り短い人生の時間は、ここで過ごせればと希望している。」と移住を断ったのだ。帰るとき、おばあちゃんは1本の淡い黄色の小菊をくれた。そして「自分の住むところを大切にしてくれよう、地球の後塵を歩まないようにね」。宇宙船が離陸するとき、主人公はおばあちゃんの庭の小菊に「さよなら！」と。

これは第5回香港のコンクールで第1位の受賞作である。小さくて可憐な小菊が、環境破壊された地球で生き残れるような願いから、地球人への警告を込めた、環境問題提起のテーマである。

作品⑪ 「殺猪 (あたり屋)」 王雨蓉 作 (中国云南省)

干ばつが続いたある地方で、息子が出稼ぎで消息不明。政府からの救済金も滞納してもらえない。父親の老昌は血を売って生計を立てているが、医者からはもうやめないと命が危ないと忠告

された。この時、都会ではあたり屋という商売があることを耳にする……。この日、彼はやっと決心がついた。娘の花ちゃんを連れて都会へ出たのだ。飴玉を買い道端で娘を待たせた。はやい速度で走る高級車が向かってきたその時、飴玉を手に娘に道をわたれとサインを出したのだが、車が娘にぶつかる寸前、彼は娘に向かって走った。ブレーキの音と同時に、女の子の悲惨な叫び声が聞こえ、彼は血まみれで倒れた。車から一人の青年が降りてきて逃げようとした。車は盗んだもので、共犯者らは郊外で彼がくるのを待っているのであるが、ぼんやりと農村からやってきた老昌をみて、驚きを隠せずにひざまずき「お父さん！」と叫んだ。

これは世界華文コンクールの高校生部第3位の受賞作であり、経済開放にともなう格差社会での悲劇である。結末に息子の出現が偶然すぎる構想だが、あたり屋の悪いイメージに、親子愛の深さと社会問題の深刻さを交差させて描写し、社会的現実の厳しさを露呈させている。

(3) 家族関係のテーマについて

作品⑫ 「天使の子供」 陳舒屏 作（シンガポール）

交通事故で夫を亡くした妻が、息子には父親は天に昇って、天使になったと聞いて聞かせた。バレンタインディに、いつも夫から庭に植えた白いバラの花のプレゼントをもらった。夫の思い出が多すぎて、悲しみから解放されたいため、息子とニューヨークへ引っ越したのである。ある日、息子のビリーが家にもどった時、悲しい泣き声が聞こえてきたのである。母親が部屋で父親と写った写真を見て泣いている。「どうして泣いているの?」「お父さんはずっと私たちのことを見守ってくれるでしょう?」と。ビリーは悩んだ、部屋から出て、庭に隣のお爺さんと会い、お爺さんの庭にある数百本の白いバラの花をみて、悩みを彼に打ちあけた。そこでお爺さんはビリーに自分のいうとおりするように提案した。翌朝、ビリーは早く母親を起こして、ベランダへ連れていった。庭には白いバラで作った「LOVE」の文字が見えた。「お母さん、これは天使のお父さんから、バレンタインディのプレゼントだよ。」母親は作業のために雪で体が濡れて、服も汚くなったビリーを抱きしめた。

「いいえ、あなたからのよ!」

「いいえ、天使のお父さん……」

「天使から世界で一番貴重なプレゼント——あなたをくれたのよ!」

心温まる親子のきずなの深さを描写する、親子愛の作品である。お爺さんのアイデアも、もう一つの愛の形であろう。

作品⑬ 「拯救」(たすけて!) 李明蕾 作（シンガポール）

忙しい刑事を務める父親が仕事の鬼で、家族との絆を失ってしまい、娘が8歳のとき、とうとう妻はがまんにたえきれず、家をでて離婚することになったのである。それ以来、娘も成長につれて、常に寂しい思いをしながら、不良に落ちてしまう。刑事として常に褒賞されるほど立派だっ

たが、娘の行為に悩み、「失敗な夫」そして「失敗な父親」と自嘲するばかりだった。ある日の朝、日直者から「ボス、荷物が届いているよ」と。差出人を見ると、娘の見慣れた筆跡で「父の日おめでとう！」と書いてあった。ふとこの数日忙しくて、娘のことなどまったく眼中になかったことを思いだしたのである。娘はまだ自分のことを気にかけてくれているんだなと思い、胸が熱くなった。家に帰ろうとした時、突然「ボス、事件だ、女の子が自殺ではないかと？覚せい剤の注射過量、二日前に死んだと考えられるのだが・・・うん6月16日。」彼はすぐに現場へ向かう指示を出したが、同時に娘にもうしわけないと思った。しばらくして、彼は娘からのプレゼントを開けてみた。一冊の古いノートだった。娘の日記、母親が家出してから、娘の日々のこころの記録だった・・・父親に対する愛と関心を求める叫び声の記録だった。最後の日の記録に「お父さん、あなたの娘なのに、覚せい剤をするなんて・・・お父さん・・・私はあなたの関心が欲しいだけ・・・」と書いてあった。

これは現実的意義の深い作品であり、世界華文コンクールでは第2位の受賞作品である。家族愛に夫婦の絆、そして親子愛の重要さを、忙しい都会生活の人びとに反省させる設定である。題名「拯救」（たすけて！）も意味深長である。

作品⑭ 「申しわけありません」 廖麗紅 作（香港）

幼い時から、父親が毎日のように酔っ払い、母親に暴行をかさねる。離婚したいが、夫に脅迫されて家にとどまっていた。5年前、母親が父親の貸主に殺害され、血まみれの母親のそばには娘の彼女ひとりしかいなかった。その後、娘はおばさんを頼って成長したのち弁護士になった。母親のお墓参りにいったら、長年会わなかった父親にあった。反省の意識が見られない狼狽姿の父親は、娘にしつこくお金を要求するのである。弁護士の職業にとって、無頼漢の父親がいることを世間に知られたくないから、5万円の手形をわたした。それからたびたびお金をせびる父親に、娘は困りはてていた。ある日また父親が20万円を要求した。「そんなお金はもうないよ、出ていって！」と娘。「最後だから・・・」としつこくつきまとう父親を、娘は殴ったのである。父親は立腹し、テーブルの上にあったナイフを手にして娘に向かった、娘は逃げながら台所にあった包丁を持って、父親の首を刺した・・・彼女は母親のことを思いだした。後に娘は自己防衛を理由に、殺人罪にならなかった・・・が、娘の彼氏から「果物ナイフをなぜそこに置いていたのかい、いつもナイフは大嫌いなのに？今後気をつけないとね・・・」と彼女に、すると「私はわざと置いていたのよ。」と彼女は答えたのだった。

作品⑬と⑭は同様に父親と娘の葛藤を描いたストーリーである。偶然に両作品とも母親の犠牲が父親と娘の愛怨のもとになっている。そして両作品のタイトル「拯救」、「申しわけありません」は、ともに娘から父親への心の叫びである。「自殺」も「殺人」も社会的行為として認めるべきことではない。しかしこの二つの作品に描かれた真実は、決して幻の世界ではない。

作品⑮ 「内疚（後ろめたさ）」 梁婉芳 作（香港）

母親が交通事故に遭い、昏迷状態が続く中、父親が懸命に看病する。植物人間状態の母親を見て、親戚筋は父親に諦めて再婚すればと勧めたが、父親に断られ、毎日欠かさずに病院へ母親をみまうのである。時間の経過とともに、父親も老いてきたし、言葉も少なくなった。10年の歳月が流れたが、ついに奇跡は起こらなかったのである。

ある日、いつものように父親が母親の手を握って話かけている。妻が自分の声を聞こえているのだと信じている。すると突然母親の指が動き、父親はあわてて医者を呼んだ。父親は心から喜んで感動したのだ。母親が目覚めたことは、すぐに病院中に広まっていった。そして父親の献身的な看護の結果だと感心されたのである。母親は魔法が解けたように、ゆっくりと目を開いた。自分の知らない病室を見まわして、最後に父親の顔に視線がとまった。復活できた母親の口から、だれもが驚く一言が「私は離婚したい」と。父親は沈黙していた。がその目には涙がにじみ、言葉はなかった。

その後、両親は本当に離婚した。すべての人が驚いた、私もこの事実を信じたくなかった。

当初母親は父親の不倫について問い詰めたが、父親は認めなかった。母親は弁護士事務所へ離婚協議書にサインするために行ったのだが、乗ったタクシーがトラックと衝突する事故を起こしたのだった……。

この作品は第3回香港微型小説コンクール、中学生部の1位を受賞している。テーマよりも描写手法が優れている。植物人間の母親を献身的に看護する父親の心理状態は、作者が最後に明らかにし、タイトルもそれを示したのである。夫婦愛は他人同士が結ばれる絆である。その愛情は、深く育むことも、紙一重で恨みにも転化されるのである。この作品は子供の目線から、自分の両親の愛と恨の現実を客観的にとらえた、微型小説ならではの秀作である。

作品⑯ 「重獲新生（よみがえる人生）」 曾繁華 作（マカオ）

陳進は孤児だった。父親はギャンブルに溺れて、家庭崩壊の後、母親は困苦のはて病気で亡くなってしまい、父親も行方不明になったのだ。陳進にとって、唯一生き残る道は、勉強して、立派に自立することだと考えた。孤児院の院長も彼の強い意志を理解し、彼を支援し続けた。医学部に入っても勉学に励んで奨学金をもらい、院長の負担を軽減できるよう頑張ったのである。そして彼は医者になった。

ある日、彼は患者のカルテをもって、診察室へ入ったが、患者の名前が長年行方不明の父親だったのである。同名だろうと彼は考えた。この患者は腎臓を患い、移植しないと完治できない状態だった。3ヶ月後に患者は退院したが、彼は腎臓の提供者は誰であったかを病院で尋ねた。そして看護師たちから「あなたの息子さんです」と。病院で息子に会い、「お父さん、新しい人生を始めましょう！」と握手を求められた。父親は息子を見て感激の涙があふれた。

これは世界華文微型小説コンクールで、第3位の入賞作品である。作品の主題は⑮、⑭作品と同じく、親子愛を描写している。内容に関しては特別に新しい着想ではないが、愛と寛容が新た

な絆をもたらすところで、⑭と⑮の作品の趣旨とは相違して、読者に絶望を希望に変え、前向き
の人生観へと導く作品と考える。

作品⑰ 「自由行」何超雲 作（香港）

阿敏と阿哲はほかの人と違い、常に行動をともにしている。5歳まで家に閉じ込められた生活
を過ごしたが、ある日母親が二人を外へ連れ出した。それからまた5年経って、15年が過ぎた
時、阿哲の心にはふとある思いが浮かんでいた……ある寒い雨の日、阿哲は昏迷から目覚め
て、病院にいることに気付いた。背中にずきずきとした痛みを感じるのである。手を伸ばして阿
敏を触ろうとしたが、阿敏はそこにいなかったから、どうして？と驚いた。これまで阿敏がいる
ことで、時には邪魔にも思ったが、しかし一旦離されてしまうと、なにかさびしい思いが胸に詰
まってきたのだ。これからは自分一人で人生を歩むことになるのだと……。

この作品の一番注目するところは、そのテーマが世界ニュースでも知られている、連体児のこ
とからとりあげた点であろう。作者は連体児の視点から、細かい心理描写を通じて、彼らの心情
を表現したのである。特殊な身障者を題材に、現実的問題点をとらえた好作品である。

（4）恋愛関係のテーマ

作品⑱ 「失恋の来訪」侯麗雲 作（香港）

「失恋」を擬人化し、主人公の恋愛観を改める主題である。擬人化された「失恋」と「寂寞」
という幻の存在を通して、主人公にまつわりながら、心と愛に対する認識を再確認させ、失恋の
苦悩から脱出させるという内容である。

作品集では数少ない恋愛に関するテーマにおいて、優れた表現力の創作であると言える。第一
回香港微型小説コンクール第2位の受賞作である。失恋した彼女は初めて自分のことを愛するこ
とは、自分の心と感情を直視し、自分のすべてを受け入れることから、初めて他人のことを
真剣に愛することができる、と作者は主人公の経験を通して語ったのである。

上述した諸作品について、明らかに創作のテーマの幅が広く、そして想像力が豊富である。中
高生である作者たちは、自分たちの実生活の範囲から、はるかに超えた身近な現実社会へ、さら
に世界へと視野が広がっている。この作品集に、普段の生活の場として、学生又は学校教育に関
係する問題をとりあげる作品も多く見られた。しかし全体的にみると、このようなテーマは意外
と少ないように思われる。成長の悩みを抱える年齢でありながら、彼らが描写するテーマとその
内容は、社会への関心の高さであり、そこに世相が見え隠れしているのである。また創作テー
マの思考主旨は、道徳、倫理観を強調する教訓的意義が重要視されている。そして「愛情」をテ
ーマにした内容に関しては、耽美的な若者の恋愛物語よりも家族、夫婦、親子愛のテーマが多く見
られる。テレビドラマ世界の中のロマンチックな、または悲劇的な恋愛は、若い中高生たちにとっ
て、現実的な感受性はまだ乏しい段階だったのであろう。

現在の情報社会の発達により、学生たちも多くの知識、体験を学校以外の情報から取得できるし、経験できるようになっている。新聞、テレビ、さらにインターネットなど伝達方法が氾濫している環境は、彼らが全く中高生と思われないような、創作の世界を作りだしていると考ええる。

三 創作表現の特徴について

以下は、作品集に収録された作品について、内容に触れながら、その創作表現の芸術性を考える。すでに作品集の冒頭の序文に、作者たちの表現に対して、現代微型小説の基盤的構造、および一般的によく使う手法には熟知していると評価している。確かに多くの作品に、微型小説の伝統的手法、意外な結末で締め括る構想がよく使われている。上述した数多くの作品には、その要素が備わっている。例えば⑭「内疚」(後ろめたさ)にみえる、どんでん返しの結末は、まさに典型的な作品である。1500字という短いストーリーに、主人公たちの人生観を示さなければならぬので、場面の移動、起伏の激しい内容と共に、きめ細かい心理描写も表現に不可欠な要素である。作者たちが中高生とはいえ、彼らの新鮮な感受性と表現力は決して一般作者に劣らないと考えてよい。以下、創作の芸術性について、特に表現の特徴が顕著な作品を数例とりあげる。

作品⑱ 「沈思する秦俑」李泓森 作(香港)

国宝級の文化財「秦俑」を主人公に、彼の目線から現世と古の価値観を交互に描写している。まず自分が国宝として掘りあげられ、どこかへ搬送される。重いと搬送者に文句をいわれる。次には展示され老夫婦が彼を見た時、秦時代の政治について「暴政だったのか？ 始皇帝の天下統一、軌道、文字などの統一、また万里の長城を建設することによって、外敵を防御でき、後世に貢献したではないか、今の香港を見てもわかるだろう」などについて口論する。そのあとは、自分の生きた時代に場面を移され、当時自分たちが製造された時の苦労と悲惨さを回憶する。最後に展示場の「秦俑」から涙が流れたと、清掃者が不思議に思った時、ガラスの中の秦俑は自分が生きた2000年後の世界をじっくり見つめながら、沈思するのである。

この作品は第一回香港の微型小説のコンクール第2位に輝いている。構想は時空を突破し、2000年前の「秦俑」に命を吹き込み、古今の場面を移り変えながら、秦俑の目線で心境を語る。実に荒誕かつ空想的世界である。作品集にはこの作品同様「ゴッホとの会話」の作品がある。

作品⑳ 「ゴッホとの会話」朱鳳儀 作(香港)

主人公は19世紀のゴッホが生きる時代のオランダへ、そこでゴッホと対話する。主人公は彼に自殺を考え直すよう勧めながら、彼の本心と人間像を探る。ゴッホの冷酷でない人間的部分を見出すと、彼の芸術に持つ魅力は続けられるだろうかと問いかける。

⑱と⑳は第一回香港微型小説コンクールで、それぞれ第2位と第3位で入賞している。両作品とも大胆な発想を用いて、表現の芸術性を深め、その構想の新鮮さが高く評価されている。この

ように想像の世界における創作は、若い世代の作者たちにとって、日常生活で、身近に溢れる動画的ゲーム感覚の発想から深い影響を受け、関連していると考える。実際この作品集に限定しても、このような手法を用いた、芸術的表現の創作が数多くみられる。その多様性の特徴について注目したい。

作品⑲ 「私の家」 區志雯 作（香港）

主人公の家には、家具がなく、簡素で静か、そして温暖で潮湿なところである。常に浪の音が聞こえるかたわら、鳥のさえずる声が聞こえないのだ。しかし防音設備がないため、外でマージャンをしている音、人たち煩く喋る声がよく聞こえてくる。定期的に家の検査をする探査器が家に入り込むが、私はいつも緊張してしまう。そして「健康です。」といつも言われるそうだ。ある日に激しい振動が続き、私は追い出されそうになって、苦しくて・・・家が倒れそう・・・息ができない・・・家はどうなってるの？・・・ああ、洪水が・・・家から離れたくない・・・「おめでとう、男の子ですよ！」

自分の家（子宮）にいる感覚を出産するまで、赤ちゃんの目線で描写しているが、読者は最後にやっと看護師の一言で全事件の真相が明らかになる。この作品は第2回香港の微型小説のコンクール高校部第2位を受賞している。こちらも動画的感覚で、巧妙な手法と大胆な発想が評価されている。

作品⑳ 「仮面」 陳欣欣 作（香港）

町にはさまざまな仮面が店で売られている。主人公の蔣光正は自分がつけている仮面に不満を抱き、同僚が「おべっかをつかう」仮面を付けてからすぐに昇進ができた。路地で奇妙な仮面商人にであい、彼からただで仮面をもらおうと、自分の本当の顔を見せろと要求された。「いい顔だったのにこんなにも醜い顔に変形されたね」と商人。「口蜜腹剣」の仮面を貰って、「成功したらまたくるよ。なぜならあなたは私の尊厳を奪ったから」と商人に告げて、その場を去った。彼は当初自分が仮面を付けなため、ずっと人から嘲笑され、その恐怖の記憶から生活が憎しみに溢れてしまった。そして他人の仮面を外させ、その尊厳を奪おうと決心した。

第3回香港微型小説コンクール、高校部第2位を受賞作である。決してプラス思考の内容ではないが、偽り溢れる人間社会を皮肉し、世相を風刺する作品である。実は作品集に同構想の作「面譜（仮面）」（鄭佳寶 作 香港）がある。毎日会う人によって仮面をつけ替える主人公が、多くの人と同時にあった時の対応に混乱が起り、精神的錯乱状態に陥るのである。無意志のなかで屋上から飛び降りて死んでしまった。そしてやっとどの仮面をつけるべきかを、悩む必要がなくなったのだ。仮面という発想は特別新しいものではないが、両作とも主人公の複雑な心理を躍動的、繊細に描写している。

作品⑳ 「運命」 鄧穎嘉 作（香港）

彼女は必死に昔住んでいた茅屋の前に逃げてきたが、変な服装をして、手に黒いゴミ袋を持った人たちがそこを出入りしているのを目にした。袋にはなにかが動いているようだ。「ああ、自分の子供たちだ」・・・突然子供たちがゴミ袋を破って外へ出ようとしたが、すぐに人たちが慌てて、またもう一つの袋を持ってきて、子供たちを中に押しこんだのだ。彼女には涙があふれた。もうがまんできない、子供たちを助けるための決心をしたのだ。丘からゴミ袋を持った人へと攻撃し、袋を手放させようと考えた。が、突然背後から打撃を受け、彼女は気を失ってしまった。攻撃をした人はそれをみて彼女を蹴り「馬鹿やろう！このばば鳥！鳥インフルエンザじゃなかったら、お前を喰ってやるよ！」と怒鳴った。・・・彼らには彼女がなぜ突撃したのか、その理由について永遠にわかることはなかった。

これは、第2回香港微型小説コンクール中学部第1位の入賞作品である。第1位に輝いた理由には、創作の思考の深い点が注目されたと考えてよい。擬人化された母鳥を世界的大ニュースの主演に取り入れ、鳥インフルエンザ対策の一光景を、親鳥の心理感覚で描写している。その表現と芸術性をみれば、如何にもアニメーション的な場面を連想させるのである。作品にインフルエンザにかかった鳥たち、そして病気の鳥たちを殺そうとする防疫作業の人間たち、それぞれが生存のため、各自の立場と価値観に沿って行動をするのである。自然に生きる鳥たちには到底責任が及ぶことはないのに、人間世界においては、厄介者にされるのである。この騒動と罪はだれが背負うべきだろうか、問われているのである。それがタイトルに示された「運命」にかかる深意であろうと考えさせる。

以上、本稿がとりあげた多くは、高い順位の入賞作品であり、当然優れた芸術的表現の作品が収録されているのである。作者たちの創作表現についていえば、伝統的な陳述、結末構想の工夫、さらに細かい心理描写などの手法が用いられているのは明らかである。また一般的発想を突破した斬新な表現で、自己の想像の世界を展開する創作も数多くみられる。作品集冒頭の評論家阿兆氏の序文には、中高生作者たちに対し、作品の境地と趣きの深さは、まだ足りないが、大胆な創新の精神に対し、肯定すべきだと評価している。そしてこの「創新」には、まさに本稿がこれまで注目し、とりあげた「題材」と「技法」の二方面が含まれていると考える。

結 び

この作品集の作者たちは中高生であるが、読者の設定は当然学生層に限定されたわけではなく一般読者層にも十分に通用するほどのレベルに達している。さらに華文文学の視点において、世界で華文創作のできる若い世代の作者らが、それぞれの地域性を含め、多様な創作表現を昇華させている実態が、作品通して明らかである。

華人が世界中に分布する現実では、華文文学は多様な形で、綿密にネットワークされ、中国本土を含め、世界的規模で展開されている。ゆえに華文文学に関する出版物も数多く存在するので

ある。ここに収録された作者たちのように、中高生である彼らの成長と努力は、今後世界における「華文文学」の伝承の基盤であり、期待をもつべき大きな希望であるといえる。

注 釈

注1 《世界中学生華文微型小説大賽（コンクール）優秀作品》 香港超域国際教育センター・中国微型小説学会編（上海文藝出版社 2008）

注2 《第2届匯知・世界中学生華文微型小説創作大賽得獎作品集》 香港超域国際教育センター出版（2010年）

注3 第2回「匯知・世界中学生華文微型小説創作大賽」について、2010年1月6日作家凌鼎年氏の「文心專輯」の文章を参照。内容にはこのコンクールの宗旨及び参加規則などが記述されている。

注4 近年微型小説の作品集には小、中学生の読者を対象に編集されたものが多数見られる。例を挙げれば《中学生必讀の生活小小説》（光明日報出版）、《最受中學生喜愛の100篇微型小小説》（華東師範大學出版社）、《感動中學生の100篇小小説》（九州出版社）などがある。このような作品集は年々出版され、そしてその多くは学術中心の新聞社または大学の出版事業機関より出版されたものであるため、好内容、高レベルの作品であるといえる。

（せき きりん：アジア文化学科 教授）